

茶山 健太 (Sayama Kenta)

オックスフォード大学 地理環境学部 博士課程

2022 年度 ON の発表を見て

今回、オマーンでの語学学校の卒業式と重なってしまった影響で、当日参加することはできませんでしたが、イベント後に発表の様子とプレゼン資料を拝見させていただき、世界各国からの視点から見た男女の格差の発表に感服いたしました。まず、蜂谷理事の女性経営者としての視点から見る日本の男女格差に関する発表からは、いつも悲観的になってしまう自分としては、少し希望を得ることができました。私はどうしても日本における社会の変革について、遅すぎるし進歩が少なすぎると思ってしまうのですが、長期的なスパンで見ると、日本も変わっていてポジティブな進歩がみられるのだということを感じられ、ほっとすると同時に、無条件で日本のことを否定的に見てしまう自分の傾向を省みないといけないと感じました。

また、外国人留学生の発表の中では、自国における経験と、留学生として日本において生活している中で感じる、または学んだ男女格差の両方の視点を得られ、非常に興味深く感じました。自国における経験の面では、特に、中央アジア出身のお二方の発表の中で、宗教と男女格差という、自分が二カ月間オマーンにおいて生活する中で、非常に難しいなと思った点について言及しており、非常に興味深く感じました。男女の役割が宗教の中で明文化されている中で、どのようにして平等を保っていくのか、また、このコンテキストにおける平等とは何を指して、何を指すのかという点は、イスラム社会において生活する中では、宗教の根本的な部分に疑問を呈するものであり、なかなか聞くことのできないものです。日本で生活する留学生のお二人にだからこそ聞ける質問

であり、将来的により深く議論してみたいトピックです。

自国の経験の中では、もう一つ、チェ・ウンヨンの発表において話されていた、82 年生まれ、キム・ジヨンへの韓国での男女別の反応という点が、非常に興味深く感じられました。行き過ぎたフェミニズム運動というコンセプトを、女性であるチェさんから聞くことになるとは正直思っていませんでしたし、イギリスでその表現を女性が使っていたら、女性陣からかなり否定的な反応があるのではないかな、と正直思っていました。しかし、実際問題として、女性からの評価と男性からの評価がこれまで違うとなると、“行き過ぎた”という表現のニュアンスの問題はあるにせよ、男性からの理解が得られないと達成できない男女平等というゴールを目指すための手段としては、間違っていたと言わざるを得ないのかなという風に私も感じました。ただ、これほどあからさまに男女の差が存在するということが社会に露呈したという意味では、非常に意義のある第一歩だったのかなとも思われたのも事実です。

また、日本で生活する外国人留学生という視点では、楊夢さんの、日本における女性の貧困についての発表、また、貧困女子というコンセプトについて、今まで知らなかったことであり、自分の無知を感じさせられました。ただし、シャフゾドさんの発表の中では、彼にとって、日本では男女格差はないと思っていたという発言があった通り、出身国、そして各々の性別という点で、男女格差の問題に関する関心、意識はかなり異なるものなのだなということを実感させられました。

日本人留学生の発表からは、オックスフォードの博士生らしいデータの利用を見ることができ、非常に面白いなと感じると共に、やはり数字をもって説明するというのはインパクトが大きいな、と

個人的に思われました。岸上さんの発表の中にあつた、日本の女性研究者の少なさに関する発表では、リケジョという言葉によって変にカテゴリー化されてしまっている日本の理系女性研究者をどう増やしていくのかという難しい問題について、イギリスにて、比較的女性が多いオックスフォードの理系学部で研究されている方の意見を聞くことができ、非常に面白かったです。一度、どこかのタイミングでオックスフォードの日本人奨学生で、振り返る会を開いて、それぞれの意見を聞いてみたいなど感じました。

発表を見させていただき、質問をしたい点、より深く議論したい点がたくさんある非常に意義深い機械に実際に参加できなかったこと、大変申し訳なく思います。ただ、日本ではまだ数の少ない、女性がリーダーシップをとる団体から支援をいただいている身として、より一層男女平等な世界な実現を目指すには、自分の研究分野を通じても何か考えていきたいなど思われました。ON の開催と準備、本当にありがとうございました。はずだ。自然がもたらすところの平和・平穏の価値がより社会的に認識されていく中で、自然遺産のあり方が変わっていくのか注視していきたい。

以上